山科本願寺跡の庭園遺構

Garden Site of Yamasina Hongwanji Temple

柏田 有香

Yuka Kasiwada

(財)京都市埋蔵文化財研究所

1 遺跡の概要

山科本願寺は、京都市山科区西野に所在する。本願寺八世の蓮如上人によって文明10年(1478)に造営が開始され、天文元年(1532)に細川晴元率いる近江守護六角氏と法華宗・延暦寺の連合軍による焼き討ちを受けるまで、活動の中心地として栄えていた。

総面積約80haを防御施設として堀と土塁を三重に廻らせ「御本寺」「内寺内」「外寺内」の3つの郭からなる。このうち、「御本寺」は、御影堂、阿弥陀堂、寢殿などの堂舎が立ち並ぶ寺の中核である。また、「内寺内」には、一家衆や坊官の屋敷等が置かれていた。さらに「外寺内」は、絵師や塩、酒、魚等をあきなう町衆の居住区であった。以下2005年に発掘調査を実施した第8～10次調査の概要について述べる。

2 第8・9次調査の概要

調査地は山科区西野山科町30で、「御本寺」内、西辺の場所で、土塁がクランク状に屈折する部分にあたる。5月から6月にかけて調査を行った。その結果、巨大なチャートの景石を据えた泉状遺構、石敷きの排水溝、石組み溝、土塁外へ排水するための暗渠からなる庭園遺構が出土した。

3 第10次調査の概要

調査地は、山科区西野山科町28-5・6で、11月から12月にかけて行なわれた。「御本寺」の中心に近い場所である。調査の結果、多数の柱穴や礎石が確認され、この場所に建物が存在していたと考えられる。調査区の北西部には、石組みの溝(15)や石敷き遺構(163)、池(14)

からなる庭園状遺構がある。また、南西部にも同じく庭園状遺構と思われる井戸(10)、溝(9)、集石(12)があり、これらは、建物に付随する庭園であったと推測される。

一方調査区の東側には、焼成土壌(1)や埴とガラス製小玉が多量に入った焼土の詰まる土壌(3)があり、その他にも柱穴や土壌が存在する。このような遺構の密集度や重なりは、数度にわたる建て替えや改修が行われたことを示しているものと考えられる。これらの遺構の中には、山科本願寺が焼き討ちにあったことを物語る焼土層で覆われていたものもあった。

これらの焼土層や遺構の中には、大量の土器の破片が入っていたが、この当時日常生活に主に使用された土器器はほとんど含まれず、その大半が中国や東南アジアからの輸入陶磁器であった。この時期にこれほどのまとまった輸入陶磁器の出土は他に類を見ない。その中には豆彩(中国の磁器の絵付け技法の一種で、豆色(青緑色)の上絵具が特に美しく印象的なことからこの名がある。明時代成化年間(1465～87)に完成した。)の碗など非常に珍しいものもある。また、仏具の一部と思われる大小のガラス製小玉や金銅製飾り金具なども出土している。

これらの遺物の豊富な内容、中でも珍しい輸入陶磁器の出土は、この場所を使用していた人物の豊かな経済力を物語る。また、出土した柱穴や礎石の大きさから考えられる建物の規模からこの場所にあった建物が、山科本願寺の諸施設の中でも極めて重要なものであったことが伺える。調査地点が「御本寺」の中心部分にあたることを考えれば、山科本願寺に関わる建物あるいは、それに付随する庭園の一部と考えることができよう。

Y=-17, 232

Y=-17, 216

Y=-17, 200

Y=-17, 184

X=-113, 272

X=-113, 288

X=-113, 304

X=-113, 320

図2 8・9次調査出土庭園遺構平面図 (S=1/200)

図3 泉状遺構・排水溝平面図および景石立面図 (S=1/50)

資料2

出土遺物写真

写真1 中国製（明）の磁器

写真2 東南アジア系陶器

写真3 ガラス製小玉

写真4 金銅製飾り金具